
偽い夢の日々

K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

儚い夢の日々

【著者名】

ZZマーク

【作者名】

K

【あらすじ】

好きだった。しかし死んでしまった少女の夢を見続けていた少年の話。

REVIVE

「死にたくない。まだ死にたくないよ。助けて隼人」

最後にそう言つてあいつは俺の目の前で死んでいった・・・

2010年4月9日

「あー・・・またあの夢か・・・」

17歳の少年、鉄隼人『くろがねはやと』はいつも決まつた夢を見て、そしていつも決まつた時間に目覚めていた。

時計を見るといつも通り午前4時30分だった。

「…・・・」が見る一起

まだ暗い中準備をし、ある場所へ行つてから学校へ行く。それが隼人の生活だつた。

鏡で自分の顔を見るとひどくやつれているのがわかった。目の下にはくまがあり、顔色も悪い。

「ひでえ顔してんだな・・・」

そう呴いて支度を続けた。

準備をすべて終え、隼人は家を後にした。

隼人は三年前に死んだ、立花 晓《たちばな あき》という少女の墓参りを毎日欠かさず行っている。

「あのな今日はお前と同期の奴らの入学式があるんだぜ。」

「お前が生きていたらなあ・・・」

ほかにもいろいろなことを曉に話し隼人は「じゃまた明日な」と言つて学校へ向かつた。

なぜだかそこには曉はいない、隼人はそんなような気がした。

いつものように学校に一番に到着し、今日は学校が始まるまで屋上でのんびり過ごしあうと思い向かつた。

立ち入り禁止の文字に目もくれず屋上のドアを開けようとすると、なんだか懐かしい感じがした。

不思議な感覚を覚えながらドアを開けると、一人の少女がいたのだが、突然ふつと消えてしまった。

だがその少女の姿はまるで・・・

「MY FRIENDS」

キーンゴーンカーンゴーン

「やべつ。もうこんな時間が。」

隼人はあの後屋上ですつとさつき見た少女のことを考えていた。あの姿はどう見ても死んだ暁だった。

「いや、そんなはずはない。ちょっと疲れているんだろう。」

そう自分に言い聞かせ急いで教室に戻った。

「ぎつぎつセーフ」

そう言つて教室に入ると親友の佐々木ささき巧たくみと新山にいやま明あかりが話しかけてきた。

ここからは小さいときからの知り合いで小学校、中学校も一緒だ。

小さい頃はよく死んだ暁と4人で遊んでいた。

「お前今朝どこに居たんだよ。結構さがしたんだぜ。」

「そうよ、あんたを探してたせいで今朝はずつと巧と一緒にだつたんだからね。」

巧は何か言いたげな表情で明を見ているが、明は目も合わせなかつ

た。

「『』めんぢょつとな。」

そつ言ひと明は「今度から氣をつけてよね。」と言つた。

巧は「まあ氣にしてないし、いじつて」とよ。「」と言ひて笑つてい
た。

「あのや・・・」

隼人は今朝会つた少女のことを話そつとしたが、そこからなかなか
口が動かない。

「どうしたの?」

明が不思議そうな目でこゝちを見ている。

「ちよつとや、後で話しがあるんだけど・・・」

そういうと二人ともうなずき、「何の話?」といった瞬間

ガラガラと教室のドアが開き担任の先生が入ってきた。

「H Rを始めるぞー、席に着けー。」

「やべつ、じゅーまた後でな」といつて2人は席に戻つていった。

「今日は入学式です。」

そんな担任の話も聞かず隼人は今朝のことをどう伝えようかそんなことを考えているとH.R.もあつという間に終わり隼人達は入学式の行われる体育館に向かつた・・・

「MY FRIENDS」(後書き)

どうも上手く書けませんね。
もしよかつたら誰かアドバイスをお願いします。

「DEBATE」

「それは？」

『氣づくとベッドのまわりには保健室らしい。

「氣がついた？」

そこには明と巧が居た。

「もう入学式の途中に倒れるから心配したじゃない。」

「「めん」

そう言い、倒れた時のことと思い出す。確かに入学式の途中の新入生代表のあいさつを今朝の少女が始めてそれを見て倒れたのか。

「ねえ」

「隼人が今朝言つてたのってあの子のことじょ？」

「私びっくりした、何気なく聞いてたら暁ちゃんそつくりで、そつくりつて言つた仕草とかなんかまるで本人みたいなんだもん。」

「俺もそう思った。あれはまるで暁本人だった。」

何故か巧も会話に入ってきた。

「それでさ、あの子いったい何者なんだろ？」「

明が一人に聞くようにして話す。

「さつと暁の分身なんだよ！」

「もひ、真剣に考えてよね！」

巧の空氣読めない発言でより空氣が死んだ氣がする・・・

「でもなんだらうへそつくりさんじやかたづけられないし・・・」

どひやら明は真剣に考えてくれてるらしい。

その後30分ぐらい話したが彼女の正体はわからなかつた。

「ええい、もうこいつなつたら明日日本人に直接聞いてちゃいましょう。」

「ええ！それは早すぎるんじゃ？」

巧と声を合わせて言ひ。

「何言つてゐの、善は急げつていつでしょ。ああ行くわよ明日。」

結局、明に押し切られ、明日彼女の教室に行って話を聞くことになつてしまつた。

隼人は不安に思いながら、彼女の正体がわかると思つと、少し明日が待ち遠しくなつていた・・・

「DEBATE」（後書き）

次回ついにあの彼女が登場です。

「QUESTHON」

「助けて、ねえ助けてよう。」

少女の体に火がつきはじめた。

「熱いよう、隼人助けて…」

助けようとするが、足がすくんで動かない。

どんどん少女についた火は大きくなつていった…

2010年 4月10日

「わあっ！」

隼人はどうやらいつもより長く夢を見ていたようだ。
時計を見るともう6時だった。

「やばい遅刻だ！」

急いで準備をしたがやはり時間がなく今日は暁の墓にはいけなかつた。

学校まで歩きながら隼人は、どうして今日はいつもより長く夢を見たんだろ？。そう考えていた。

学校に着くと、もつ明と巧がいた。

「おひす」

巧が話かけてきた。

「おはよう」

「今日の昼休みに会って行へよ」

明が突然話しかけてきた。
どうやら朝から一人で彼女のことを話していたらしい。

「クラスとかってわかるのか？」

「たしか1年1組よ。」

などと話しているうちにチャイムがなつてしまつた。

「んじや 昼休みにね。」

そう言って明は席についた。

昼休みになるとこきなり

「よし、行くわよ。」

明がそりこつた。

「行くしかないのか……」

覚悟を決めて1年1組の教室へ向かつた。

教室に着くとそのへんにいる人を捕まえ、昨日の彼女を呼んでもらつた。

「あのー、なんですか？」

そう言って彼女は現れた。

「单刀直入に聞くけど、あなた何者なの？」

明、单刀直入すぎるだろ。そう思いながら彼女の回答を待つた…

「ODESTHOZ」（後書き）

すみません。

あまり少女だせませんでした。

次回こそ少女の名前公開！

「MEETING」

「今日も来ちまつたなあ……保健室……」

巧はそう呟いた。

「いったいなんなの?」

明が怒り口調で言つ。

ベッドには一人の少女が寝ている。
まるで死んでいるように寝ているが、一応呼吸はしていた……

（1時間前）

「何者と言われても、ただの1年1組の生徒としか言えません。」

少女は困ったような顔をして言つた。

「名前は?」

巧が聞く。

「ハルと申します。」

非常に礼儀正しいな、隼人はそう思った。

「ああもう! そんなことききたいわけじゃないの! あなたは立花暁となにか関係はあるの?」

明はそう叫んだ。

その瞬間、明らかにハルの様子が変わった。

「え？ あなた誰？ 誰なの、暁って？ 違う私は暁じゃない！ 私の名前
はハルよ！」

ハルは急に叫び始めた。

なんだか何処を見ているのかよくわからない。

「何なの熱いよおー助けて！」

ハルは、隼人にしか聞こえないような声で最後に言った。

「助けて隼人…」

そう言つてハルは倒れた…

「どう見ても暁の名前を出してからだよな、彼女がおかしくなった
のは。」

巧がいつもと違つて真面目なことを言つ。

「やつぱりこの子と何か関係あるのかな？」

明が言つ。

だが隼人にはわかつてしまつた。

倒れる前のあの助けを求める顔、あれは暁だつた。

「いや」

二人の視線が隼人に向かつた。

「あれは暁だ」

え！？という顔をして二人共こっちを見ている。

「でも暁ちゃんは死んだはずじゃない。」

「そうだ。俺もここがわからない。暁は死んだ、でもあれは確かに
暁だ。」

「なんか頭がこんがらがつてきたなあ。」

とりあえずハルは明にまかせて隼人はもう少し考へることにした。：

「MEET-HZG」（後書き）

読みづらくてすこません。できれば感想よろしくお願ひします。

「REMEMBER」

隼人はハルを明にまかせて暁のことを思い出してみた。

彼女は両親との3人暮らしだった。

彼女には友達がいなく学校が終わるとすぐに家に帰る、それが当たり前だった。

そんな彼女と隼人達が出会ったのは、隼人達が小学2年生の時だった。

隼人達はいつも暁の家の近くの公園で遊んでいて、暁はいつもそれを見ていた。

そんな彼女に気づいた隼人が暁を誘つて一緒に遊んだのだ。

それ以来彼らはいつも一緒に遊び、全員同じ中学に通っていた。

そんなどある日、暁は小学生の頃から好きだった隼人に思い切って告白をした。

隼人は、いいよとだけ言って2人はつきあい始めた。

隼人が高校3年生になつた時にあの事件は起きた。

暁の家が火事になつたのだ。

暁の家族は3人とも逃げ遅れてしまつていて、隼人はそれを助けるために家の中に入つた。

だが予想以上に火が強く中に入つても何も見えなかつた。

だが隼人は暁だけは見つけて助けようとした、だがそんな時間はなかつた。

隼人は後からやつてきた消防隊員に救出された。

しかし暁だけは助からなかつた。

その日から暁の助けを求める声が耳から離れなくなり、毎朝その火事の夢を見るようになつたのだった。

「はや・・・と、隼人！」

明の声だ、どうやら眠つていたらしい。

「やつと起きたね。」

「ああ。」

ベッドを見ると、いつの間にかハルの姿はなかつた。

「そりそりあの子なんだけど、ついさっき目が覚めたのよ。1人で帰らせるのは心配だから家まで送つていこうとしたんだけど断られちゃつたの。」

「 そりゃ。」

隼人は残念そうに言った。

「 でもあの子とはもう一回話さないといけないよねえ。」

「 どうやらまた明の悪い癖が始まつたらしい。」

「 それじゃあ明日の放課後もう一度彼女の教室に行きましょう。」

「 この時点でもう2人に拒否権はない。」

「 わかったよ。」

2人とも抵抗はあきらめた。

「 んじゃ また明日、学校で会いましょう。」

「 そういって3人は分かれた。」

「 そう言えば今朝はいつも夢が少し変わっていたことを思い出した。」

「 なぜだろ？ 、 そう思いながら隼人は家に帰った・・・」

「REMEMBER」（後書き）

少し読みづらかったんではと思っています。
次は気をつけるので、また読んでください。

「UONHOUSE」(前書き)

どんな些細な事でもいいので感想待っています。

「UOZUME」

「ううして……ううつの」

「隼人なら助けてくれると信じたのに……」

2010年4月11日

「やばい、また寝過しした！」

隼人は急いで準備をして学校へ向かった。

「珍しいな2日続けてギリギリに来るなんて。」

学校へ着くともう巧は来ていた。

「お前じゃどうしたんだよ巧、いつもは遅刻してくるくせに今年に入つてからは遅刻しないんじゃないか？」

ふふんと笑いながら巧は

「クラス替えのおかげでさ、あこがれだつた子と同じクラスになつたんだよ。だからさ早く来てずっとその子のこと見てるんだよ。」

「お前それは気持ち悪いからやめた方が……」

「いいだろ別に!俺が悪いんじゃなくてあの子が可愛過ぎるのがいけないんだ!」

「はいはい、わかつたよ。」

もう何を言つても聞かなさうだったので巧は放課後まで放つておくことにした。

放課後になり、また3人でハルの教室を訪ねた。

「また来たんですか・・・」

ハルは明らかにいやそうな顔をしていた。

「もうこ」2田変な夢を見て頭が痛いんです、だから早めに終わらせてください。」

いや今日はあなたの家に行かせてもらつわ。

明かりがまた唐突に言い出した。

一
し
で
し
よ

強引に了解を得てハルの家に向かつた。

「人の家をじろじろ見なくていいので、さつさと家に入つてください。」

家中にはすゞしく綺麗で、ホーリなんて微塵もおちていなかつた。

明と巧は家中を隅々まで見に行ってしまった。リビングにいるのは2人だけになってしまった。

「そういうの、さつき言ってた変な夢つていつたいどんなの？」

「それがどうでもいい」とは思えず隼人は聞いた。

「えつと確かに少女が熱い熱いといつていったり、助けてとか、隼人とか言っている夢です。でも暗くて少女の顔はよく見えないんですよ。」

隼人はぎょっとした。

「それってまさか火事の夢なんじや。」

「そうです。火がすごい勢いで少女を包んでいくんです。あれ？そういうあはあなたの名前も隼人では？」

ハルが同じ夢を見ているそれは隼人を混乱させた。

そしてリビングに置いてあつたペンダントはより隼人を混乱させた…

「REALINE」(前書き)

感想待つてます。

「REALINE」

「あのペンドントは？」

隼人はあのペンドントに見覚えがあった。

あのペンドントと同じものを隼人は既に送ったからだ。

「あれは…わからないの、私が気付いたら持っていた。」

「ハル！頼むよく教えてくれ！」

隼人はつい大きな声を出してしまった。

「わかりました。話しましょう。」

「といつても、私には中学3年以前の記憶がないんですね。」

「だからそれ以降のことしか知りません。それでもいいですか？」

「ああ、頼む。」

隼人はあのペンドントについて聞くことができた。

「実はあのペンドント記憶を無くしたときにはもう持っていたんです。」

「だからどうやって手に入れたかは、わかりませんでした。」

「しかしよく見るとペンダントにHという文字が彫られていたんですね。」

「まだそのとき自分の名前が思い出せなかつた私は、これで自分の名前にHがつくとわかり、そこから自分の名前をハルと名乗ることにしたんです。」

「…」

隼人は迷つていた。

告げるべきなのか、そうでないか。

しかし意を決して言つた。

「違ひなんだ。」

「なにがですか？」

「君が今持つてゐるペンダントは俺が暁にあげたもので、そしてHというのはもらつた人の名前じゃなくてあげた俺の名前の…隼人のHなんだ。」

「え？でもそれじゃあなんで私が持つてるんですか？」

「今の情報から必然的にこの答えが出る。」

「そり、こいつとしか考えられないんだ。」

「君はハルではない。死んだはずだった暁だ。」

「え？」「… も…」

「君が見始めた夢はさうと暁の家が火事になつたときの夢だ。」

「…少し時間を下さい。」

ハルは下を向いていて表情はよくわからなかつた。

「わかつたまた明日にくるよ。」

ヤツツヤツツテ廊下に出た。

廊下にはまだ巧と暁が「うひうひしながらはしゃいでいた。

巧にいたつては、

「ヒヤホー！あ！携帯のストラップがない！」

とか叫び、走り回っていた。

「おー、一人とも帰るぞ。」

「え？話しあもういいの？」

「いやまた明日来る」とした。

「んじや帰りましようか。」

「俺、ストラップなくしたんだけど…」

「また明日探しなさい。」

そう言って家を出た。巧は渋々家を出て。

「また明日くるからな」

とか言つていた。

隼人は今日のことにつつ納得のいかないことがあった。

あれが暁だとするならそれはどうしてあの火事で生きていたのか。
ということだ。

「あーあ…」

隼人は今夜、疲れそうにはなかつた…

「REALINE」（後書き）

読みづらくてすいません。
誤字、脱字などありましたら、教えてください…

「THE HAZKING」（前書き）

更新遅くなつてすみませんでした。

いつも通り、感想待つてます。

「THINKING」

隼人はこれまでの話を整理してみた。

隼人は暁が好きだったが火事で暁は死んでしまった。
それから隼人は火事の時の夢を見続けた。

隼人は今年の入学式で暁によく似たハルという少女を見つけた。

ハルは隼人と同じ夢を見始め記憶がなく、そして隼人が暁にあげた
ネックレスを持っていた。

整理するとだいたいこんなところだらう。

やはりハルは暁だらう。

しかしそこで大きな矛盾が発生する。

「いったいどうなつてんだ？」

どう考へても暁が生きているはずがない。

あの火事のとき、助けに行つた隼人が奇跡的に生きていたものの意
識不明の重体で目覚めたのは1週間後だつたというレベルだ。

しかし隼人の意識がないときに、暁の葬式は終わっていたため、実
際に暁の死を確認はできていない。

「いったい、どうなつてんだ？」

そんなことを言つて、夜が明けようとしていた。.

隼人が考へてゐる時ハルも考へていた。

「ハル。」

ハルは突然名前を呼ばれて驚く。

「どうしたんだいハル？ そんな顔して？」

ハルを呼んだのは、仕事から帰つた父だつた。

「いやなんでもない。」

ハルは記憶を無くしても優しい父にとても感謝していた。

「心配しないでお父さん。」

父には余計な心配をさせたくなかつたのだ。

しかし父は、なあハルと話しだした。

「もしかして、今ペンドントのことで悩んでるをじやないか？」

ハルはうつむいた。自分はハルじゃなく暁という別の人間だ、そう考へると父の顔を見れなかつたからだ。

父の顔は見れなかつたが、まるで何かを決心したような声だつた。

「ハル、明日は大事な話がある、だから学校は休んでくれ。」

父は返事も聞かずどこかへ行ってしまった。

多分自分の書斎に行つたのう。

ハルは、明日の父の話が気になつて眠れず朝をむかえた。

「UOZEMI」（前書き）

ついに10話まできました。

そしてユニーク数が500を突破しました！
読んでくれた人ありがとうございます。

「CONFIDE」

2010年4月12日

「おはようハル、昨日は寝れたかい？」

ハルはこくりと頷いて、父の向かいにあるイスに座った。

「それじゃあ、お前の本当の事を話そう。」

いつもニコニコしていた父の真剣な顔を初めて見たような気がした。

「ハル、それはお前のペンダントだ。それはお前がある人から貰つたものだ」

今まで完全に理解した、自分はハルではなく暁という人物なのだと。

「隼人ね」

ハルの言葉に父はびっくりしていた。

「隼人君に会つていたのか！？」

「ええ、高校の先輩だったから。昨日は家に来ていたわ。」

「どうか、それなら話が早い、昨日彼はペンダントに気付いたんだ
るつ~。」

「ええ、そして私のことを曉だと言つていた。」

消えてしまいそうな声でハルは言つた。

「流石隼人君だな。すべて悟つたのか…」

それなら話が早い、と言つて父はついに真実を言つた。

「隼人君の言つていることに間違はない。お前は曉という人物なんだ。」

「まったく明日また行くつて言つたのになんで学校休むかなああいつ。」

今日は明と巧は忙しいため隼人は珍しく一人でハルのクラスに行つたがクラスメイトに欠席だということを伝えられ、仕方なく一人でハルの家に向かつていた。

ハルの家に一度しか行つていかない隼人は、

「あれ？道こっちであつてるのか？」

などと言つて道に迷つていて、ハルの家に着くのに昨日の2倍の時間がかかるつてやつと到着することができた。

そういえば巧のストラップも探さないとな、と思いつつ家のベルを鳴らすと、

「どうぞ。」

という隼人にはなんだか聞き覚えのあるような低い男の人の声が聞こえてきた。

「誰だつたかな？有名人じゃないし、なんて考えて隼人はその人物と再会し隼人は驚いた。

「やあ久しぶりだね隼人君。何年ぶりなのかな？」

隼人は何故ここに暁の父がいるのだろうかなどと思いながら。

「どうも、暁のお父さんお久しぶりです。」

なんてしどろもどろになりながらもなんとか返答をした。

「まあいろいろ疑問はあるだろ？が、いすに座りたまえ。」

隼人は椅子をひき、暁の父の目の前に座った。

「さて、もう君は気づいているのだろう？何故ここに私が居るのか、そして何故あのペンダントをハルが持っているのか。」

隼人は首を縦に振るという動作だけをした。

ここまでくるともう簡単な話だ、ハルは暁であるからペンダントを持つているのであって、そして暁の父だからハルの家に居るのだ。

「つむ、ならば私が今話すべきことはただ一つ、暁がどうして生きているのかだろ？」「

「はい、お願ひします。」

隼人は力強い声で言った。

これすべてがわかるんだ、隼人はそう確信して暁の父の話を一字一句聞き逃さないようにすることにした・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3970m/>

偽い夢の日々

2010年10月21日05時05分発行